

書評『技術の思想史』中山元著 倫理や政治へ広がっていく

2026/5/23 2:00 | 日本経済新聞 電子版

私たちはいつもテクノロジーを忘却する。技術は最初、目新しいものとして現れる。しかしそれは、やがて自然や社会のなかに溶け込み、当たり前前の環境となる。そして忘れられた頃、人間の存在や社会のあり方を深く方向づけていく。

技術を「思想」として捉える視座が必要なのは、技術が私たちの意識から消えてしまうからである。もしも技術が単なる便利な道具やインフラにすぎないのなら、そこに哲学や思想は必要ない。しかし実際には、技術はそれを扱う私たちの視線、生活、思考によって、その姿を変えていく。著者が「あまりに自然なものとみられるために、人間たちはその世界が技術によって作られたものであることを忘却してしまいかねない」と述べるように、技術は世界を作ると同時に、作られた世界を自然なものとして見えなくしてしまう。

本書が単なる機械や工学の歴史ではなく「思想史」であることの意味は大きい。私たちは「技術/テクノロジー」といえば、つい最先端のAIや、ロケットや原発のような巨大な装置を思い浮かべてしまう。しかし本書が扱う「技術」はそれだけではない。たとえば「言葉」や「文字」、あるいは「統治」でさえ技術であり、著者はそれらの目に見えない技術を「無形の技術」と呼ぶ。

冒頭で取り上げられる技術が、ソクラテスにおける「知」であるのも象徴的だ。古代ギリシアで技術を意味する「テクネー」は、ものを作ることを指していた。しかしソクラテスは、制作と知を切り離さない。自己を知ることにもまた広い意味での「技術」なのである。政治家もまた、自己と共同体を知ることを通じて社会を作る。この無形の技術は、制作を超えて、知や倫理や政治へと広がっていく。

著者は「技術の歴史は人類の歴史と同じ長さを持っている」と語る。本書はその言葉通り、ソクラテスから、デカルト、カント、ヘーゲル、ハイデガー、ベンヤミン、フーコー、さらにドレイファスやデュピュイ、カーツワイル、ポストロムまで、2500年にわたる人類の知的歴史を技術という観点からたどり直す。



(平凡社・3630円) なかやま・げん
49年、東京都生まれ。哲学者・翻訳家。著書に『〈他者〉からはじまる社会哲学』、訳書に『純粹理性批判』など。※書籍の価格は税込みで表記しています

私たちがテクノロジーを忘却するからこそ、いま目の前の技術と数千年前の技術を同じ地平で捉える必要があるのだ。

《評》 哲学者 下西 風澄



技術の思想史

著者：中山 元

出版：平凡社

価格：3,630円（税込み）

この書籍を購入する ([ヘルプ](#)) : [Amazon](#) [楽天ブックス](#)

 [「日経文化」のX \(旧Twitter\) アカウントをチェック](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.